

総説

「看護観」についての概念分析

Concept Analysis of “the Philosophy of Nursing”

萩野谷浩美¹⁾日高紀久江¹⁾森 千鶴¹⁾

Hiromi Haginoya

Kikue Hidaka

Chizuru Mori

キーワード：看護観、概念分析、看護の本質、看護哲学

Key words : Philosophy of Nursing, Concept Analysis, Fundamental Nature of Nursing,
Nursing Philosophy

要旨

「看護観」は明確な定義がないまま、看護教育や看護の実践の場で使用されてきている。そこで本研究では「看護観」について概念分析を行い、その概念を明確にすることを目的とした。概念分析の方法は、Rogers の手法にしたがいコーディングシートを作成し、概念の属性、先行要件、帰結に関する記述を抽出した。文献検索を行い 466 文献から「看護観」を追究している 66 文献を分析対象とした。分析の結果、属性は【看護に対する自己洞察】、【専門職業人としての行動指針】、先行要件は【自己の看護に対する俯瞰】、【患者との対峙】、【探求心の向上】、帰結は【看護の質の向上】、【職業的アイデンティティの確立】であった。そこで看護観は「看護の対象者と対峙し自己の看護を俯瞰することを通して、看護に対する自己洞察から得られる看護専門職業人としての行動の指針となる価値観である」と定義することができた。

I. 緒言

「看護観」は、看護教育や看護実践の場で従来から使用されてきたが、いまだその定義は明確にされていない。

文献を検索すると、1975 年に国分が、「最近看護界で看護観という言葉がよく使われるようになった」（傍点著者ら）と述べており、同年に日本看護協会看護教育問題研究班は看護観について、「ある角度からの看護への歓心、言い換えれば看護に対する一定の見方」と定義したことを紹介している。1978 年には日本看護協会から「看護観の確立をめざして一卒後 3 年目看護婦の緑陰セミナーより」という書籍が出版されたが、書籍のなかに看護観の定義は見当たらなかった。また、ナイチンゲー

ルの看護観についての著述（近森、1978；佐々木、2012）やヘンダーソンやロイ、オレムそれぞれの看護観について紹介した論文（久木原、2018）はあるが、それぞれの著者が各理論の原作から看護観をとらえて述べているだけであり、各理論家が「看護観」として述べているわけではない。

一方、「看護観」の類似の概念には、「看護の哲学」が挙げられる。哲学とは人が生きていく際の指針となるべき理を探ることであり、人間や世界などの物事についての本質を追究し、その真理を探究し論理的に考察することである（柴田、2009）。また人間が避けて通れない生老病死などの現象を扱う哲学では、看護の対象である人間に焦点が当てられている（伊藤、2012）。Wiedenbach（1964/

1) 筑波大学医学医療系 University of Tsukuba Faculty of Medicine

1969) は看護の哲学の基礎となる 3 つの概念として、①生命の賜物に対する尊敬、②人間存在の尊厳・価値・自立心および個性の尊重、③自分の信ずるところに従って力強く行為するための決断力を挙げている。しかし、他の理論家の看護の哲学そのものに関する記述はみられない。

教育の観点からは、第二次世界大戦後の GHQ (General Headquarters: 連合国最高司令部) の指導により、看護教育は医学モデルから看護モデルへの転換を図り、それに伴い 1967 年に看護師養成学校指定規則が改定された(稲葉、花岡、2000)。

この改定では看護の概念を明確化、科学的思考の模索(草刈、2011)、また学生の主体的な学習参加や積極的に思考することを目標に掲げる、看護の質を重視した教育への変遷を遂げた(岩下、1974)。

1987 年に樋口は、看護師が専門家であるならば自分の行動の規範として看護観を持つ必要があると述べている。「看護観」は看護師の行動の規範となる価値観であり、価値観とは価値判断に伴った視点であり、個人の信条に関わっている(田浦、2002)。

また、「看護観」の研究では、看護観の育成や形成について、その要因に関する検討が行われている。看護学生を対象に、「基礎看護学実習」(富田、小林、寺田、2004; 長谷川、鶴田、中村、熊谷、2014)、「成人看護学実習」(山下、和泉、2003; 野戸、川崎、富澤、皆川、山内、2005; 掛谷、名越、細川、安福、2007)、「統合実習」(井上、渡邊、2015) など、実習前後での学生の看護のとらえ方の変化や学生のレポートを分析した研究が多い。一方、臨地実習指導者(藤内、2012)、5 年以上の看護師(畑中、伊藤、2016)、熟練の看護師(村瀬、2014) など、看護実践の経験がある看護師を対象にした研究では、インタビューによる質的な分析が散見される。しかし「看護観」について、「自分の考える看護とは何か」(小田ら、2015)、「学生が授業や実習を通して考えられた看護に対する見方、考え方」(富田、小林、寺田、2004) という表現はあるものの、看護観の定義は統一されていない。

少子高齢化という社会構造の変化に直面してい

る我が国では、看護師に複雑で多大な役割を社会から求められている。これまで「看護観」という言葉の概念が明確でないまま教育や研究が行われてきたが、人々の健康生活を支援する高度専門職業人である看護師を育成するにはその行動の規範となる「看護観」について明らかにすることが重要であると考ええる。「看護観」の概念が明確になれば、看護基礎教育のみならず、臨床の場における看護の質の向上を目的とした教育の指針となる提言ができると考える。

II. 研究目的

本研究では、「看護観」についての概念分析を行い、その概念を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 研究の方法

「看護観」は医療や社会背景など時代の要請により変化するものであると考え、概念を時間経過や社会背景とともに変化するものと捉えている Rodgers の概念分析の手法を用いた。

2. 検索対象

対象とした文献は、日本独自の「看護観」について概念を明らかにするために和文献に限って検索を行った。データベースは医学中央雑誌を用いて検索した。キーワードは「看護観」のみとし、論文の種類は「原著論文」に加え「解説/特集」も含めてシソーラス検索を行った。検索年は限定せず、2018 年 7 月 30 日までの間で検索した。

3. 分析方法

分析は Rodgers の概念分析の手法にしたがい、コーディングシートを作成し、概念の属性、概念に先立つ先行要件、概念に後続して生じる帰結に関する記述を抽出した。

記述内容をコード化して、共通性と相違性に基づいてカテゴリー化を行った。さらにカテゴリーの関連性を構造化して概念モデルを作成した。分析は看護研究者 3 名が独立して分析を行った後に、

意見が一致するまで討議を重ねることで妥当性を確保した。

4. 倫理的配慮

本研究は、看護教育研究学会の倫理規定に基づいて実施した。また本研究にあたり開示すべき利益相反はない。

IV. 結果

1. 対象となる文献

検索の結果 466 文献が検索され、全文献タイトルと抄録を読み、その適性を判断した。文献のタイトルに「看護観」と表現されているが、内容が「看護観」の概念が明記されていない 400 文献を除外し、66 文献が対象となった。

本研究の概念分析によって得られた属性、先行要件、帰結を述べ、概念モデルを図 1 に示す。以下、文献の内容を『 』、サブカテゴリーを〈 〉、カテゴリーを【 】で示す。

2. 「看護観」の属性

「看護観」の属性として、【看護に対する自己洞察】、【専門職業人としての行動指針】、の 2 つのカテゴリーを抽出した（表 1）。

カテゴリー【看護に対する自己洞察】は、看護を考える基盤となる考え方や自己の看護を客観視

することを示すものであり、看護を概念化する基盤になると捉えられた。カテゴリー【看護に対する自己洞察】は、〈実践に対する自己の礎〉、〈客観視による意味解釈〉、〈深化への継続的変容〉の 3 つのサブカテゴリーで構成されていた。

論文中の定義で多くみられた『看護に対する見方や考え方』や『自らの看護に対する考え方や姿勢』と、『看護実践の中で大切にしている考え方』、『看護技術に表現される』など看護実践のとらえ方を含んだ内容から、サブカテゴリーとして〈実践に対する自己の礎〉と捉えることができた。

また、『獲得した知識や技術を意味づけする』、『患者のなかに生じている事実を認識する』、『自己の看護の考え方を認知する』、『実践体験から振り返り、思考する』という内容で構成されており、自己の看護を振り返り、その意味を理解し概念化を目指す姿勢を示していると考えられ〈客観視による意味の解釈〉と捉えることができた。

また『肯定できる体験を積むことで強化する』、『自己の内面で段階を追って変化する』などの内容で構成されていることから、看護観が変化し続けるという側面を捉えていると考え〈深化への継続的変容〉とした。

カテゴリー【専門職業人としての行動の指針】は、専門職者として何を行うべきか、看護において自身が大切にしたい責任と捉えることができた。

表1 看護観の属性

カテゴリー	サブカテゴリー	内容	文献
看護に対する自己洞察	看護実践に対する自己の礎	看護に対する見方や考え方	畑中ら, 2016; 長谷川ら, 2016; 松江ら, 2017; 栗田, 2015; 當間, 2014; 村瀬, 2014; 藤内, 2012; 加藤ら, 2011; 細川, 2006; 掛谷ら, 2007; 齋藤, 2009; 鳥井, 2007; 野戸ら, 2005; 高坂, 2005; 伊藤, 2005; 近藤, 2004; 富田, 2004
		自らの看護に対する考え方や姿勢	後藤, 2013; 栗田ら, 2010
		看護実践のなかで大切にしている考え方	長谷川ら, 2016; 畑中ら, 2016; 八木, 2006
	客観視による看護の意味の解釈	看護技術に表現される	畑中ら, 2016; 工藤ら, 2010; 松江ら, 2017
		獲得した知識や技術を意味づけする	杉田ら, 2018; 渡部ら, 2012
		患者のなかに生じている事実を認識する	栗田ら, 2010; 立石ら, 2002
専門職業人としての行動指針	看護の深化への継続的変容	自己の看護の考え方を認知する	鈴木他, 2017; 畑中ら, 2016
		実践体験から振り返り、思考する	長谷川ら, 2016; 岡田ら, 2015
		肯定できる体験を積むことで強化する	畑中ら, 2016; 藤村, 1984
	看護実践における秩序と価値	自己の内面で段階を追って変化する	畑中ら, 2016; 當間, 2014; 村瀬, 2014; 掛谷ら, 2007
		学習や実践の体験を積み重ねることで深化する	井上ら, 2015; 栗田, 2015; 高坂, 2005; 伊藤, 2005; 野戸ら, 2005
		自分なりの倫理的価値観	杉田ら, 2018; 渡部ら, 2012; 山下ら, 2002
看護の方向性の指針や判断基準	看護の方向性の指針や判断基準	看護の中心的価値	長谷川ら, 2016; 栗田ら, 2010; 齋藤, 2009
		看護に対する主体的な自覚	長谷川ら, 2016; 八木, 2006; 藤村, 1984
		専門職の判断や行動の基盤	栗田, 2010; 掛谷ら, 2007; 藤内ら, 2002
		理論や知識、経験の他に個人的価値観を専門家としての役割に取り入れる	畑中ら, 2016; 坂井, 2010; 藤村, 1984
		看護の方向性を定める	畑中ら, 2016; 藤内, 2002; 藤村, 1984
		看護を提供する行動の基準	井上ら, 2015; 栗田, 2015; 高坂, 2005; 伊藤, 2005; 野戸ら, 2005

【専門職業人としての行動の指針】は〈職業に対する価値と秩序〉、〈方向性の指針や判断基準〉の 2 つのサブカテゴリーで構成されていた。

また『自分なりの倫理的価値観』、『看護の中心的価値』、『看護に対する主体的な自覚』、『専門職の判断や行動の基盤』、『理論や経験の他に個人的価値を専門家としての役割に取り入れる』という内容から看護を行う上で重要となる価値について述べている内容であるため〈看護実践における秩序と価値〉と捉えることができた。

さらに『看護の方向性を定める』、『看護を提供する行動の基準』という内容から〈方向性の指針や判断基準〉と捉えることができた。〈方向性の指針や判断基準〉は、専門職業人として対象者に合わせたよりよい看護を実践する際に必要な指針や判断の基準を明確にすると捉えることができた。

これらの属性にみられる看護観は、看護専門職人として看護を深く考え、対象者に合わせた看護を実践する際の行動の指針となる価値観を明確にしていくという、看護の本質的な性質であると捉えることができた。

3. 「看護観」の先行要件

看護観の先行要件として【自己の看護に対する俯瞰】、【患者との対峙】、【探求心の向上】の 3 つのカテゴリーを抽出した (表 2)。

カテゴリー【自己の看護の対する俯瞰】は自己の看護を見つめ、客観的に捉えようとする姿勢を示しており、同僚や自分の看護を意識化することによって〈多様性への気づき〉をし、自分の看護や今まで行ってきたことを振り返るという〈実践の意識的な振り返り〉、看護実践の中で困難な状況に直面し、理想の看護師像とのギャップを感じることで〈内的な行き詰まり感〉が生じると捉えることができ、3 つのサブカテゴリーで構成されていた。カテゴリー【患者との対峙】は、患者の生き方や思いを理解し、寄り添おうとする体験と捉えることができ、〈患者によって生じる葛藤〉と、患者と出会うことや患者に共感することで構成される〈寄り添うという経験〉の 2 つのサブカテゴリーで構成されていた。

またカテゴリー【探求心の向上】は、自己の看護を内省し、さらに自己の看護を高めていきたい

表 2 先行要件

カテゴリー	サブカテゴリー	内容	文献
自己の看護に対する俯瞰	多様性への気づき	看護師の語りで、自己の行動を意識化する	木寺ら, 2018; 伊良波ら, 2013
		看護を語ることで自分の認識や感情を整理する	畑中ら, 2015; 岡田ら, 2015
		同僚の看護実践から自己の体験を意識化する	伊良波ら, 2013
		自分の看護とは何かを見つめる	杉田ら, 2018-a; 岡田ら, 2015
自己の看護に対する俯瞰	実践の意識的な振り返り	いままでやってきたことをもう一度見つめ直す	杉田ら, 2018-a; 木寺他, 2018; 小田ら 2015; 坂井, 2010; 松尾ら, 2008; 細川, 2006; 富田ら, 2004
	内的な行き詰り感	看護実践のなかで困難な状況に直面する	杉田ら, 2018-a; 畑中ら, 2016
		看護職者としての後悔、葛藤がある	畑中ら, 2016; 坂井, 2010
患者との対峙	患者によって生じる葛藤	理想の看護師像とのギャップを感じる	杉田ら, 2018-b; 坂井, 2010
		患者の「生き方」を受け止めるという経験をする	村瀬, 2013; 坂井, 2010; 小野ら 2002
		患者との関わりを通して感情が揺れる	畑中ら, 2015; 村瀬, 2014; 當間, 2014
	寄り添うという経験	忘れられない看護体験がある	村瀬, 2014; 酒井, 2010
		自己の認識を揺がす患者に出会う	畑中ら, 2016; 村瀬, 2014
		患者の「生き方」を理解する	杉田, 2018-c, 栗田ら, 2015; 村瀬, 2014
探求心の向上	前向きな内省	患者に寄り添い思いを受け止める	長谷川, 2017, 平山ら, 2007
		患者の希望を叶えたいという思いで関わる	藤内, 2012; 平山ら, 2007
		学習や看護体験を積み重ねることで深まる	松江ら, 2017; 畑中ら, 2016; 野戸ら, 2006
	モチベーションの高まり	看護実践の問いや根拠を見直す	杉田ら-b, 2018; 松江ら, 2017; 武藤ら, 2015; 鳥井, 2007; 高坂, 2005
		看護実践に対する喜び・感動を経験する	村瀬, 2014; 村瀬, 2012; 坂井, 2010
		他者から承認され看護に自信を持つ	長谷川, 2017; 畑中ら, 2016

表3 帰結

カテゴリー	サブカテゴリー	内容	文献
看護の質の向上	看護に対する意欲の向上	患者の持てる力を発揮するよう看護に取り組む	木寺ら, 2018; 村瀬, 2014
		問題意識を持ち、患者に合った看護を提供する	畑中ら, 2016; 岡田ら, 2015
		自分らしい看護を目指して実践する	杉田ら-b, 2018; 木寺ら, 2018; 齋藤, 2009
	看護実践の深化	看護実践が深まる	木寺ら, 2018; 畑中ら, 2016; 村瀬, 2014
		心身の苦痛を和らげ、心情に応える看護実践をする	木寺ら, 2018; 長谷川, 2017; 松井ら, 2017; 栗田ら, 2015; 鶴田ら, 2014; 相原ら, 2004; 藤村, 1984
		よりよい看護を創造する	木寺ら, 2018; 栗田ら, 2010
看護師像の再構築	自分を振り返り良い看護の提供のために自分を磨く	杉田ら-c, 2018; 長谷川, 2017	
	自分らしさを模索し、目標に近づくよう努力する	木寺ら, 2018; 杉田ら-a, 2018; 畑中, 2016; 齋藤, 2009; 平山ら, 2007; 高坂, 2005	
	自己を向上させる	後藤, 2013; 関谷ら, 2005; 近藤, 2004; 小野ら, 2002; 藤村, 1984	
職業的アイデンティティの確立	自己の成長	看護ケアを承認されることで看護に自信を持つ	畑中ら, 2016; 岡田ら, 2015; 當間, 2014; 秋庭ら, 2013
		ありのままの自己を認める	杉田ら-a, 2018; 岡田ら, 2015; 村瀬, 2014

という意味と捉えることができた。カテゴリー【探求心の向上】は学習や看護体験を積み重ね、根拠をもって看護を実践したいという〈前向きな内省〉と看護実践で得られた喜びや、他者から承認され、看護に自信をもつ〈モチベーションの高まり〉という2つのサブカテゴリーで構成されていた。

4. 「看護観」の帰結

「看護観」が形成されることによって【看護の質の向上】と【職業的アイデンティティの確立】の2つカテゴリーが帰結として抽出された(表3)。カテゴリー【看護の質の向上】は、サブカテゴリー〈看護に対する意欲の向上〉と〈看護実践の深化〉で構成されていた。〈看護に対する意欲の向上〉は『患者の持てる力を発揮するよう看護に取り組む』、患者にあった看護を提供し、『自分らしい独自の看護を目指す』で構成されていた。またサブカテゴリー〈看護実践の深化〉は、『看護実践が深まる』ことや患者の『心身の苦痛を和らげ、心情に応える看護実践をする』、『よりよい看護を創造する』という内容で構成され、看護を実践していく中で自己の看護を問いながら深化させていることがうかがわれた。

また、カテゴリー【職業的アイデンティティの確立】では看護観によって、自己の看護に対する見方が定まり、看護師としての活動に責任を持ちつつ、アイデンティティが確立すると捉えることができた。職業的アイデンティティの確立は、

自分を磨き、自分らしさを模索するという〈看護師像の再構築〉と〈自己の成長〉という2つのサブカテゴリーで構成されていた。『ありのままの自己を認め』、『自己の向上』を目指し、『他者からの承認も得て自信を持つこと』で自己の成長が認められることがうかがわれた。

5. 概念の定義

概念分析の結果、看護観は「看護の対象者と対峙し自己の看護を俯瞰することを通して、看護に対する自己洞察から得られる看護専門職業人としての行動の指針となる価値観である」と定義した。看護観は看護の体験と体験の意味づけを繰り返し行うことによって行動の指針となる価値や専門職業人としての責任を高めることにつながることで、また行動の指針となる価値や専門職業人としての責任は相互に関連し合っていると考えられた。そのことにより専門職業人として職業的アイデンティティを確立し、看護の質を向上していくことができると考えられた。

V. 考察

1. 看護観の概念の特性

これまで、看護観は「自分の考える看護とは何か、どんな看護をおこなっていきたく考えるのかについて表現された内容」(小田、武藤、小林、石井、野田、松本、2015)、「それぞれの看護の根幹となる考え方、看護の行為を動かすものとなる

もの」(和泉、山下、2003) などそれぞれの論文で研究者が定義してきており、曖昧ではあった。しかし看護学生であれ、看護師であれそれぞれの「行動の基盤となる考え」という部分は大凡一致した見解であることが認められた。また看護観は、学内での学習だけではなく、看護学生のように看護学実習であっても、看護の実践体験が必要となる(長谷川ら、2015)。また、このときに対象者である患者に共感することで患者を深く知る体験があるときに成立する。看護は実践の科学であり、対象者なくして看護は成立しない。さらに体験を意味づけるという看護を行っている自己を客観視するという視点が重要となる。自己の客観視する視点がなければ、対象者との間に生じているすれ違いやこころが揺れる体験を感じることもないままに過ぎてしまうためである。このように看護観は、自己の看護経験を内省し、自己洞察することを通して、倫理的葛藤や専門職業人としての責任を実感することになる。経験したことの意味を深く考えることができると、自己の価値観をも揺るがし、再考することができる。しかしこれらの一連の経験がないと看護師としての成長は難しくなる。すなわち看護実践の経験を通してはじめて専門職業人である看護師としての成長になり、またさらに看護実践の質も高くなると考える。

2. 看護教育への活用

これまでの「看護観」に関する研究では、看護観育成に対する教育の課題として、学生の思考や表現の可能性を前提に記録や対話による言語化を支援し、学生の経験を教材化する関わりが必要(小田ら、2015) という意見や、学生の看護観を醸成できるように教育を工夫すること(野戸、川崎、富澤、皆川、山内、2005)、意欲を高めることの必要性(園田、上原、2015) などが述べられている。

かつて看護師養成のみの目的ではなく、看護学生が主体性をもって学習できるようにすることの重要性を述べた岩下(1974) は、看護教員が看護に対する見方を深め、それを行動で示すこと、自分自身が活気に満ち、鋭い感覚をもつことが重要

であるという意見を紹介している。また、看護教員の持っている看護観は、学生の看護観を形成する踏み台になるという意見も紹介している(岩下、1974)。2018 年に看護系大学の教育課程数は 263 課程、入学者の約 1/3 が大学生となった。ここ 20 年位の間に一気に高学歴化したものの、最近になってその教育の質が問われている。岩下(1974) が述べているように教員の「看護観」を見つめ直すことも必要になっているようにも思われる。学生が看護の学習を通して「看護観」を形成できるようにするためには、教員自身が看護観をもち、それを学生に語ることが求められていると感じられた。

教員は、基礎的な学習を促すだけでなく、学生が対象者に共感できるように対象者の状況を説明することが必要である。また教員は学生が患者の関係で感情が揺れる体験を見極め、気づかせることも重要となる。さらに教員の「看護観」に基づき、学生が体験したことの意味を考え、内省と洞察を深められるように促すことも必要になると考える。このように学生自身が自己の看護観を醸成できるように促すことが重要と考える。

3. 本研究の限界と今後の課題

今回、これまでに我が国で発表された原著論文および総説や解説も含めて「看護観」の概念分析を行った。その結果、「看護に対して探求心を持つことを基盤に、看護の対象者と対峙し自己の看護について俯瞰することを通して得られる、看護実践を意味づけ、看護専門職業人としての行動の指針となる価値観である」と定義することができた。価値観は個人の内面にあって価値判断の基準になることを指している。

海外では「看護観」“Philosophy of Nursing”ではなく、「看護哲学」“Nursing Philosophy”と表現されている。Wiedenbach. E. (1964/1969) は「哲学とは看護婦ひとりひとりの信念や行為に基づく生活や現実に対する態度であり、看護婦の行為の動機づけとなって何をすべきかを考えるのに役だったり、何かしようと決意するのに影響を

与えたりするものである」と述べている。我が国において「看護の哲学」より「看護観」が多く用いられるようになったのは、我が国と西洋の、すなわち東洋と西洋の「哲学」の捉え方の違いによる可能性も考えられる。東洋における哲学の考え方は思想である（マラルド、2014；アダム、2015）。思想は個人の生き方や価値観であり、感じ、思考するものである。しかし、西洋の「哲学」は合理的で論理的観点にたって理論的に説明することが中心であり、我が国の哲学である思想とは考え方が異なっている。「看護哲学」との違いについては、今回十分に検討ができなかったため今後の課題とする。

文献

- アダム・オジュグ・ダデウシュ（2015）日本における哲学教育の歴史と現状．京都産業大学論集，48，215-231．
- 近森英美子（1978）社会変動期とナイチンゲールの看護観．総合看護，13(4)，30-48．
- 後藤姉奈（2013）同一施設に定着して働く看護師の職務満足度と看護観との関連．三重看護学会誌，15(1)，27-35．
- 長谷川真美，鶴田晴美，中村昌子，熊谷玲子（2014）看護基礎教育における看護観形成に関する研究－基礎看護学実習・前後のイメージ変化－．東都医療大学紀要，4(1)，55-63．
- 長谷川真美，鶴田晴美，中村昌子，熊谷玲子，吉岡栄子，大澤久美枝，奥井鈴江（2015）看護基礎教育における看護観形成に関する研究－基礎看護学実習Ⅱ前後の看護イメージの変化．東都医療大学紀要，5(1)，31-40．
- 長谷川雅美（1996）精神科看護から学んだ私の看護観．精神科看護，57，95-98．
- 畑中純子，伊藤収（2016）看護観が体験から発展するまでの看護師の思考のプロセス．日本看護科学学会誌，36，163-171．
- 樋口康子（1987）日本の看護の質はこれでよいか－日本の看護観－．教育と医学，35(8)，741-747．
- 稲葉佳江，花岡眞佐子（2000）看護技術の概念の検討－看護学教科書からみたその変遷と発達．教授学の探究，17，65-88．
- 井上千香，渡邊玲子（2015）「看護統合実習」で学生の看護観育成に影響を及ぼした要因．中国四国地区国立病院附属看護学校紀要，11，38-45．
- 伊良波理絵，嘉手苅英子（2013）病棟看護師が同僚の看護実践から看護者としての認識や行動に影響を受けた過程の特徴．沖縄県立看護大学紀要，14，71-80．
- 伊藤能之（2012）保育と看護における援助概念に関する考察．帝京短期大学紀要，17，97-106．
- 岩下清子（1974）目的教育からの脱皮－看護教育問題研究班座談会の総括と問題提起．看護，26(5)，112-116．
- 掛谷益子，名越恵美，細川つや子，安福真弓（2007）成人看護学実習前後の看護観の変化．インターナショナルNursing Care Research，6(1)，59-66．
- 亀山花子（2016）看護観をどう伝える？どう引き出す？主任さん、あなたやスタッフの看護観を語れていますか？．管理・教育・業務，25(5)，13-18．
- 勝又里織，松岡恵，三隅順子，清水清美（2005）人工妊娠中絶を受ける女性に対する看護者のケア体験と看護観の分析．日本女性心身医学会雑誌，10(2)，85-93．
- 川越久実子，繁田眞綾（2016）看護の概念化による相互作用の展開－退院支援、新人看護師と退院支援調整看護師の価値観・看護観の共有による成果．NURSING BUSINESS，10(4)，316-321．
- 川島みどり（2017）今だからこそ、看護をみつめよう．近畿高等看護専門学校紀要，15，1-18．
- 看護協会看護婦部会編集（1978）看護観の確立をめざして－卒後3年目看護婦の緑陰セミナー．日本看護協会出版会，東京．
- 木寺望美，長井万季（2018）看護の語りを聴いた看護師の看護観や看護実践への影響．第48回

- 日本看護学会論文集（看護教育），122-125.
- 国分アイ（1975）“看護観”について思うこと．看護学雑誌，39（4），327.
- 小山舞香（2016）私にとっての看護の歴史と現在、そして未来へ．日本看護歴史学会誌，29，17-19.
- 工藤二郎，小田日出子，上野恵子，窪田恵子，伊藤直子（2010）看護のアイデンティティー、最終章－看護学生、新人看護師、年長看護師3集団の看護観の分析より得られた教育上有用となりうるキーワード－．西南女学院大学紀要，14，1-8.
- 久木原博子（2018）歴史的背景のなかで育んだ先人たちの看護観を未来に繋げ発展させるために．キャリアと人生観，11（1），81-86.
- 黒田るみ，戸田肇（2007）看護観の再構築と実習指導者像の形成を目指した研究会の実施とその評価－平成18年度に開催した「宿泊研修」および「病棟研修」における研修生の学びの特徴－．北里看護学誌，9（1），65-70.
- 草刈淳子（2011）我が国における看護の評価の歴史と新学会への期待．日本看護評価学会誌，1（1），19-33.
- 野戸結花，川崎くみ子，富澤登志子，皆川智子，山内久子（2005）成人看護学実習における看護観形成．弘前大学医学部保健学科紀要，4，69-74.
- マラルド・ジョン（2014）日本の近代初期における西洋哲学の摂取．国際井上円了研究，2，200-216.
- 松江なるえ，富田幸江（2017）臨地実習における学生の看護観に関する文献の動向と課題．埼玉医科大学看護学科紀要，10（1），41-48.
- 松田直正（2018）看護観のみつけ方．看護学生，65（14），48-57.
- 向川原史子（2017）人を理解し、人とめぐり会うことが看護観を変えていく．ナースマネージャー，19（1），90-93.
- 村瀬智子（2014）熟練看護師の看護観を変えた経験-2名の熟練看護師のライフストーリーの比較．日本赤十字豊田看護大学紀要，4（1），55-63.
- 西村路子，小寺利美，加賀有未（2017）自身の看護観の見つめ直し、知識の共有を図る副師長へのナラティブ．看護展望，42（5），467-471.
- 西谷美幸（2008）看護観の育成に関する一考察－看護学的認識および介護学的認識の形成過程を通して－．富山大学医学会誌，18（1），14-20.
- 小田亜希子，武藤雅子，小林幸恵，石井尚美，野田淳，松本美和子（2015），看護大学生の看護観に関するテキストマイニングを用いた分析．活水論文集，3，3-21.
- 岡田純子，森本ゆう子，中山由美，田丸朋子，坂井利衣，田中結華（2015）看護師のメタ認知的スキルの獲得を促す院内教育に関する文献検討．摂南大学看護研究，3（1），16-23.
- 才野原照子（2018）未来に託す看護観－保健医療福祉と看護の動向の概観から－．キャリアと人生観，11（1），23-30.
- 佐々木秀美（2012）ナイチンゲールの看護観-その目的実現のための教育方法－Nursing is not an Art but a Character－．看護学統合研究，14（1），46-66.
- 柴田隆行（2009）井上円了の「哲学」観．井上円了センター年報，3-20.
- 清水暁美（2018）看護観は永遠に自らの問いかけ．キャリアと人生観，11（1），109-112.
- 園田麻利子，上原充世（2015）成人看護学実習における看護の概念化に関する考察．鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要，19（1），27-36.
- 杉田久子，唐津ふさ，西村歌織（2018-a）臨床看護実践における看護師の知の様相－新人看護師の臨床実践における知の語り－．北海道医療大学看護福祉学会誌，14（1），23-29.
- 杉田久子，福井純子，西村歌織，唐津ふさ（2018-b）臨床看護実践における看護師の知の様相－三年目看護師の臨床実践における知の語り－．北海道医療大学看護福祉学会誌，14（1），37-42.

- 杉田久子, 唐津ふさ, 西村歌織 (2018-c) 臨床看護実践における看護師の知の様相—2 年目看護師の臨床実践における知の語り—. 北海道医療大学看護福祉学会誌, 14(1), 31-35.
- 高木健治郎 (2005) 哲学的知識の限界. 哲学の探求, 32, 87-97.
- 高口榮子, 山崎あゆみ, 藤原康子 (1996) 看護婦としての成長を支える院内研修—看護観の育成、感動体験を通して—. 看護実践の科学, 21(5), 18-23.
- 高橋シュン (1983) 戦後における看護教育の変遷. 日本看護科学学会誌, 3(1), 2-9.
- 田村蓉子, 松田由美, 広山恵 (2000) チームのサポートで看護観を確立—卒後3年目の研修への教育的かわり—. 看護管理, 10(11), 900-905.
- 高瀬裕子 (2017) 主任時代はあえて看護ケアを実践し看護観を磨こう. 管理・教育・業務, 27(2), 29-32.
- 田浦武雄 (2002) 価値観と日本人の思考形式. 名古屋柳城短期大学紀要, 24, 1-11.
- 坪井由加里 (2016) 「看護現象学」を活用して看護観を見える化し語り合う—主任として働き、学び続ける原動力を身につける—. 管理・教育・業務, 25(5), 24-29.
- 戸田肇, 黒田るみ (2008) 看護観の再構成と実習指導者像の形成を目指した研究会の実施とその評価—『指定規則』の改正を機にまとめられた文部科学省の提言—を視座に据えて—. 北里看護学誌, 10(1), 64-69.
- 戸田肇, 黒田るみ (2009) 看護観の再構築と実習指導者像の形成を目指した研究会の実施とその評価—北里大学看護キャリア開発・研究センター移行に向けて—. 北里看護学誌, 11(1), 27-31.
- 戸田肇, 黒田るみ, 佐藤淑子 (2006) 看護観の再構成と実習指導者像の形成を目指した研究会の実施とその総括的評価, 北里看護学誌, 8(1), 67-70.
- 富田幸江, 小林たつ子, 寺田あゆみ (2004) 基礎看護学臨床実習 I で捉えた看護学生の看護観に関する検討—看護観レポートからの分析—. 山梨県立大学短期大学部紀要, 9(1), 61-74.
- 藤内陽子 (2012) 臨地実習指導者として学生に伝えたい自己の看護観. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 37, 148-155.
- 頭山悦子, 武田勝子, 恩田美紀, 竹村華織, 坂元了子 (2013) 卒後2年目の看護師の看護観を育む—臨床現場における看護の概念化支援. 看護実践の科学, 38(11), 50-62.
- 山口千鶴子, 二ノ宮聡子, 浜祐美 (1998) 「私の看護観」作成による看護現場の変化. 看護実践の科学, 23(4), 62-67.
- 山口洋子 (2013) プロとしての看護観 (その1) —患者さんの力を信じ、ともにありたい—. NURSING BUSINESS, 7(2), 126-129.
- 山下満子, 和泉春美 (2003) 学生の看護観の育ちと指導上の課題—成人看護学実習 (内科系) 前後のレポート分析と看護観形成に影響を与えた因子から—. 京都市看護短期大学紀要, 28, 81-90.
- 渡部昌子 (2013) 中堅看護師の看護観の発展を促す看護管理者の視点. 看護人材教育, 10(2), 2-8.
- 渡部昌子, 栗原保子 (2012) 中堅看護師の看護観の発展を促す指導方法に関する研究—指導過程の分析より—. 第42回日本看護学会論文集 (看護管理), 127-130.
- 和泉春美, 山下満子 (2003) 学生の看護観の育ちと指導上の課題 (第1報). 京都市立看護短期大学紀要, 28(1), 71-79.
- Wiedenbach, E. (1964/外口玉子・池田明子訳 1969) 臨床看護の本質—患者援助の技術—. 現代社, 東京, 31.

Abstract

The phrase “philosophy of nursing” has been used in nursing education and nursing practice without clear definition. The purpose of this research was to analyze and clarify the concept of “philosophy of nursing.” The concept analysis was based on Rodgers’s method: a coding sheet was created and then descriptions of the attributes of concept, antecedents, and consequences were extracted. We searched the literature and chose 66 reports pursuing “philosophy of nursing” as a target of analysis out of 466 reports. The results of the analysis were as follows. As attributes, we obtained “self-insight in nursing” and “having an action guideline in place in the case of specialist nurses;” as antecedents, “having a broad perspective on one's nursing work’,” “interfacing with patients,” and “improvement of the inquiring mind;” and for consequences, “improvement of quality of nursing” and “establishment of an occupational identity.” From these results, we were able to define the philosophy of nursing as “a sense of value that nurses can obtain from self-insight toward nursing to guide their professional actions by interfacing with patients and having a broad view of their work.”